

仲人になつて



永代美知代

友人のMさんが結婚します

『Mがとうとう結婚するよ』
良人から斯様聞かされた時、私は落膽しちまひました。
かりにも友人の目出度い結婚話を聞かされて、がつかりするとは變ですけれど、私は全くあてが外れたのでした。

『まあ誰と？』

『例のK君の細君の妹さ』

『さう』

『とうとうKの奴に奪られちやつたね』
良人は私と同じに屹度心の中で残念がつて居るに相違ありません

『Mさんはさう自家へなんか餘り寄りつかなくなるか』

『もしれないわ』

ニコニコ 第七十四話

仲人になつて

『如何して？』

『だつてKさんと云ふ好い御兄弟がお出来なさるんだもの』

『ナニ、そうしたものでもなからうよ』
併し、併し、どうして私達は、もつと早く好い嫁さん
をめつけ得なかつたのだらう、Mさんの氣に入りさう
な女を、私達それ自身の周囲から早くめつけてお世話
さへしちまつたら、Mさんは親友以上に、より親しい
關係を結んだのであらうものを——それにしてもKさ
んは好い妹のある細君をお持ちになつてゐてお仕合せ
な事、KさんはこれからあのMさんと友人である上に
又新しい兄弟になつておしまひなさる。

『それにしてもYさんは何て仰有るでせう』

『何と云ふものか、兎に角良縁だもの』

『それはさうよ、だけれども——』

Yさんは兼々斯様云つてらつしつた。

「Mは何故あんなに結婚を急ぐんだらう、あんなに急がなくてよさそうなんだ」

「併しM君も最う三十だからね」

良人が云ふと、御自分は今年三十二で以て四人の子の親になりかゝつてらつしやるYさんはそれを打ち消して、

「いいさ、三十だつて幾つだつて、まだく大丈夫だよ、一體どんな候補者があるんだか知らないが、ゆつくりかゝつて好いのをめつけるのが一番だ、兎角貰ひ急ぎをするとか駄目なものだよ、それに僕はMのワイフに就いては大に希望があるんだ、先づ才色雙備の才媛たる事は勿論さ、そして金持ちの娘で、第一まとまつた持参金がなくちやいけないんだ」

「まあ、その持参金を如何するおつもり？」

「如何するつて、やつぱり費つちやふんですよ」

「嫌だ、そして持参金を皆な費つちやつたら如何うします？」

「どうもしない」

「まさかおん出さんちやありませんまいね」

「誰がそんな！僕等は其處まで不徳義ぢやありません」

「見て下さい、寫眞です」

Mさんの持つてらつしつたお寫眞は、島田に結つて、

はこせを下げた振袖姿のそれと今一つは編の著物に束髪のおさげた服著で、看護婦から藥局生まで一緒に入れた家中でとつたのと、都合二枚でありました。目のパツパツした眉のやさしい、丈夫らしく肥つて色白さうな好い嫁さんです。

「何だかよく肥つて、氣味が悪いやうだ」

さう云ふMさんも内心の莞爾々々を覆ひきれず、妙にお鼻の上に皺を寄せて苦笑してらつしつた。

「奥さん、好い嫁さんの候補者はありませんか」

「Oさんが突然にこんな事を仰有いました。」

「何でせうまあ突然に！」

「これは失敬、併し花婿と云ふのが素敵に面白いんだ」

が、成らう事なら、



(りた居て來がるけめ女遊寺の桃)

Oさんの仰有るには

露國帝室の留學生で、目下此方の大學に居る秀才がある。留學生でこそあれ、何がさ清國留學生と一つには行かぬ露西亞人、而も故國では地主株の家柄で、身元も確乎したものである。年は當年とつて二十八歳、日本の歴史と風俗を専門に勉強してゐるので、卒業後故國へ歸ればさしづめ、モスコイ大學あたりの教授は受合である。其處で本人の希望は、高等女學校卒業以上の日本の淑女で、學問に興味を持つて、とりわけ良人の研究課目たる日本歴史と風俗に關する資料をドシドシ供給し得る二十歳から二十四五までのが欲しい、そして特に美人を望む譯ではないなるべく美人が好い、その譯は故

よ、併し考て御覽なさい、剛巧な男が金なしで居る位天下に悲惨な、そして馬鹿氣な事はありませんからね」

「本當にねえ」

そんな話をした事もありません。

Mさんの今度のお嫁さんは

お醫者の娘で、學校は東京のを卒業後、田舎の家に歸つてゐられるのださうで、Yさんの希望中第一の條件たる持参金附きでないばかり、其他は皆な完備した淑女なのであるけれど、兎に角私はそれが良人のみうちであり、私の親戚でないのが、何より物だらない氣持ちなだけですの。

でも嬉れしいではありませんか、Mさんは私達を改めて表向きの仲人になるやうに、殊更たのんで下さいました。

何がさて産れて初めてのお仲人です、何を如何して、彼を斯様してと、そんなむづかしい禮式も何も心得てゐるのではありません、ですけれども私達はMさんの仲人になる、とたゞそれだけで、二人共すつかり感激しちまひました。妙にうれしくつて、やたら莞爾々々微笑を禁じ得ない。

國へ相携へて歸つた時、身分柄交際場裡へも出入しなければならぬので、餘りに醜態で人中へつれられないでも困るからと云ふのである。

「如何です、面白いでせう、是非一人お友達を世話して下さい。」

「さうですねえ。」

私が考へてゐると、Oさんはさもなくもどかしさうに「ない事はないでせう、さうくそれに奴さん日本語もはなせますよ。」

「兎に角面白さうね、考へて置ませう。」

Oさんのつもりでは、ハイカラで變り者の私に話さへすれば、直ぐにも相當な候補者があるかと思つてらつしたもので、併し何と云つても相手は外國人、餘程毛色の變つた女でなくては、オイソレと縁談のまゝとまりつてはありません。

あれかこれが、散々考へてゐる

處へ、昔ミツシヨン、スクール時代に英語を教はつてゐたK先生が訪ねてらつした。早速その話をして相談すると、

「私が今二十年若いとねえ、直ぐにも結婚するんだけ

ど——」

四十近い今日まで獨身を立て通した老嬢が、染々さう仰有る。

「まあ先生が！」

「いゝえ本當ですよ、考へても御覽なさい、一生を學問に捧げてさ、おまけに日本の歴史風俗を外國に紹介する事が出来るんですもの、ねえ、思つたゞけでもぞく／＼するぢやないの。」

「全くね！」

先生の仰有る通り、今幾年か若くて、運命の神が私に結婚を持つて來て居なかつた昔なら、私だつて大喜びでこの縁談に胸ををどらしたに相違ない。

「ねえ、誰か一人お心當りはなくつて？」

「さうね。」

K先生は考へ深く仰有るのでした。

「何しろ相手が外國人ですからね。」

あの人なら、この人ならと思ふのがあつても、生憎恐ろしく容色が悪かつたり、容色は好いけれど頭腦が悪

かつたり、本人がよければ爾親が許可さうもなかつたり、本當に好い事と云つてはないものです。

「それにしてもK先生は何故今少し遅くお産れなさになかつたのだらう、私口惜しくつてしようがない。」

「フ、本當にねえ。」

と先生は急に思ひついて、

「Hさんは如何？」

「いや、いや。」

「如何して？あの人なら嫁きますよ。」

「生憎此方で眞平だわ。」

「だつて顔も一寸と見られる方だし、頭もはつきりしてますよ。」

「併し一生を學問に捧げると云つた柄ぢやないわ。」

「でもさうなれば又そのへりになるものよ。」

「いや、いや。」

私はあくまで頭を振りました。

Hさんは如何にも頭のハツ

キリした美人です

（なほり）

（なほり）

（なほり）

（なほり）

（なほり）

（なほり）

（なほり）

（なほり）